

鶴見橋

つるみばし

創架は宝永4年(1707)と伝えられる。日本三大名園のひとつ後楽園が岡山藩主池田家の別荘であったとき、能などを楽しみに園内を訪れる武士たちの専用橋として架けられたのがはじめとされる。

一般人に開放されたのは、明治に入ってからである。旭川べりや後楽園に舞い下りる鶴の姿が橋上から見られたことから、鶴見橋と呼ばれるようになった。

しかし、創架当時から旭川は氾濫を繰り返し、今から見れば仮橋のような木橋は「架けては流れ」の繰り返しで、これは本格的治水工事の始まる昭和初年まで続いた。

現在の橋が出来たのは、昭和に入ってからである。陸軍の大演習のとき天皇を迎える準備の一環として行なわれた工事は、起工昭和5年5月1日、竣工同年10月30日、11月3日渡橋式というから、大変な突貫作業であった。

工事を急ぐ中にも、天下の名園の玄関橋にふさわしく、木曾御料林払い下げの檜を用いた。高欄には古式ゆかしい擬宝珠ぎぼしを随処に設け、また銅製の行灯を飾るなど、数々の趣向が凝らされた。これらの橋上装飾に調和させて、コンクリート橋脚やコンクリートをかぶせて平面に仕上げた橋桁の外側面は、掻き出し仕上げに茶系の着色を施した。このへんの事情は、成瀬勝武「岡山市鶴見橋の意匠について」(『土木建築雑誌』1931-1)に詳しい。現在の高欄は、その後にコンクリートで造り直したものであるが、特殊な木目模様の塗装によって、昔の姿をそのままに伝えている。

ここで鶴見橋のやや下流にある相生橋にも少しふれておこう。鳥城うじょうの別名が示すように黒っぽい色の岡山城の南に接し、後楽園の南端に至るこの橋は明治36年(1903)の創架、旧岡山藩主池田章政の金婚記念として池田家が架設したものである。夫婦揃って相老いたことを祝って相生橋と命名されたこの木橋は、明治44年に岡山県に寄贈されるまで、池田家の私有橋だったが、一般にも供用され、できたばかりの旧制第六高等学校へ通う学生の下駄の音で、朝夕賑やかであった。現在は鋼桁に改められている。

旧城下町として発展してきた鶴見橋や相生橋周辺の旭川べり一帯を、岡山市は「文化的シンボルゾーン」と位置づけ、町並みの美化計画とともにその整備計画を実施中である。相生橋も昭和61年、歩道が各4mに拡幅され、カラータイルなどで橋上は茶系統の色調で統一され、さらにバルコニーや植樹帯も設けられて、ゆとりのある橋となった。鶴見橋から相生橋まで徒歩15分、水辺のプロムナードを歩いてから、カンチレバートラスの歩道橋月見橋を渡り、左手に鳥城を見上げながらさらに行く、相生橋に至る。〔NT〕

竣工年月：昭和5年(1930)11月

所在地：岡山市出石町-後楽園

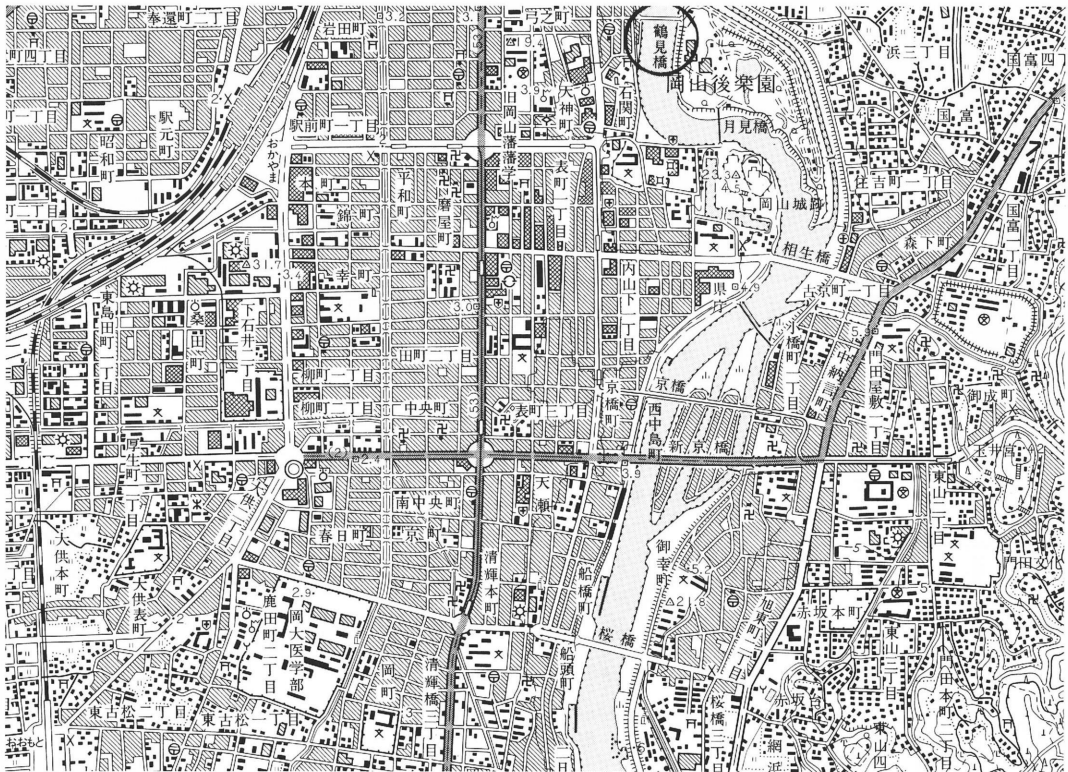
橋長・幅員：147.6m×7.5m

径間数・支間長：1×13.8m(概略)+5×24.0m+1×13.8m(概略)

形式：上路カンチレバートラスプレートガーダー



〈1994年3月29日，撮影・成瀬輝男〉



(1:25,000 岡山南部)